

■柴田 南雄(1916-1996)



作曲家、音楽評論家、音楽学者。東京帝国大学理学部植物学科、同文学部美学美術史学科卒業。作曲を諸井三郎に師事。1946年、作曲グループ「新声会」を入野義朗らとともに発足、作品を発表し始める。ロマン主義的抒情あふれる作品から12音技法やミュージック・セリエル、不確実性をとり入れた前衛的な作風、日本民謡と民俗芸能を根底においたシアター・ピースなどを生涯現役で創作。自身が番号を付した作品はno.121まであるが、最後の作品は「無限曠野 no.114」である。

作曲活動の一方、桐朋学園大学、お茶の水女子大学、東京芸術大学、放送大学、尚美音楽短期大学などで教鞭をとる。また、戦後の情報の乏しい時代から現代に至るまで、放送、新聞、音楽ジャーナリズムを通して、洋の東西を問わぬ洞察に満ち、知的刺激にあふれた旺盛な評論活動を展開した。1992年、作曲文筆の両活動により文化功労者に選ばれる。

年譜:<http://minao.ojaru.jp/nenpu.html>

■一柳 慧(1933-2022)



(撮影:岡部 好)

作曲家・ピアノ奏者。神戸生まれ。作曲を平尾貴四男と池内友次郎に、ピアノを原智恵子に師事。1949年にピアノ・ソナタで第19回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽曲)第1位を17歳の若さで獲得する。1952年渡米、ジュリアード音楽学校に留学。1959年にニューヨークのニュー・スクールでジョン・ケージに師事、その後の一柳の作曲活動を左右することになる影響を受ける。1961年に帰国後、ケージをはじめとするアメリカの実験主義音楽を紹介するほか、図形楽譜を用いた実験主義的な自作を発表する。

一柳による紹介を機に「ジョン・ケージ・ショック」とよばれるセンセーションを日本の作曲界に引き起こす。1970年代以降の作品は通常の五線記譜法に戻るが、そこには、実験主義的な作品で提起された柔軟で多層的な時間構造が反映されている。2018年に文化勲章受章。

作曲家・作品情報:

<https://www.schottjapan.com/composer/ichiyagi/bio.html>

■指揮 西岡 茂樹



1955年兵庫県生まれ。合唱指揮を田中信昭、須賀敬一の両氏に師事。

高校より合唱指揮を始め、1979年に豊中混声合唱団に入団。副指揮者を経て1989年より第8代の常任指揮者、2003年より音楽監督・常任指揮者となる。また2001年に豊中混声の姉妹団体として豊中少年少女合唱団、後に豊中ユース合唱団を創設、以来、20年以上に亘り代表・指揮者として団を率いている。他に、女声合唱団Stella(兵庫県三田市)、女声合唱団あい(山口県周南市)においても、長年、指揮者を務めている。

指揮活動は多岐に亘るが、その最大の関心は、『世界に誇ることができる日本固有の合唱芸術の創造』にあり、現代日本の創作家の意欲的な作品を、委嘱初演を含めて、とりあげ続けている。

1992年から十数年に亘り田中信昭氏を招聘して「新しい合唱音楽研究会」を主宰。多数の挑戦的な取り組みを実施し、その果実が今回の「未来へつなぐ合唱の会」の源流となっている。

現在、関西合唱連盟理事、大阪府合唱連盟副理事長、宝塚国際室内合唱コンクール委員会常任理事、一般社団法人「音楽樹」会員、日本合唱指揮者協会会員、奈良学園大学名誉教授。

■ピアノ 武知 朋子



京都市立堀川音楽高校、京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。'95友愛ドイツ歌曲コンクールにおいて最優秀伴奏者賞受賞。'03トスティ歌曲国際コンクールにおいてトスティ・ピアノ賞受賞。第17回京都芸術祭において最優秀協演賞受賞。様々なジャンルの音楽家との共演、リサイタル、音楽コンクールにおいての伴奏を多数務める。京都市立芸術大学音楽学部伴奏者。

■篠笛 土師 あき子



土師あき子(篠笛・唄・和太鼓)

1991年7月1日生。秋田市出身/大阪府羽曳野市在住。

幼少期より地元の祭囃子に慣れ親しみ、2歳で和太鼓、9歳で笛を始める。

2010年 鼓童文化財団研修所 入所。

2012年 太鼓芸能集団「鼓童」入団。

主に篠笛を担当し、年間100公演を越える国内外ツアーに参加。

2013年・2014年 国際芸術祭「アース セレブレーション」城山コンサートにて唄でソロ出演。

2013年・2015年 人間国宝 坂東玉三郎氏と舞台「アマテラス」で共演。

その他数々の坂東氏が手掛ける舞台へ出演。

2017年3月「東京2020公認プログラム」の、日本の文化を世界に発信するための企画で、バーチャルシンガー「初音ミク」と共演。

2017年8月に鼓童を退団後、大阪を拠点に、篠笛や和太鼓の指導をしながら演奏活動を続けている。

■未来へつなぐ合唱の会



Soprano

西岡 恵子、鳥井 満代、前田 萌衣、森島 美幸、中村 久美子、山本 直子
安井 聡代、中山 愛、橋本 貴子、大塚 美保子、岡野 なおみ

Alto

佐野 環、沖野 萌、野々山 恵、戸田 英子、近藤 佑、平田 晴美

Tenor

秋山 浩太、安井 直人、岡本 弘信、井上 和也

Bass

清水 英幸、橋本 恒己、守屋 篤、山本 尚義、鈴木 宏明、笠原 直也

未来へつなぐ合唱の会 第1期 演奏会

～日本合唱界の知られざる名作を歌いつなぐ～

2024年3月3日(日)

13:30開場 14:00開演

伊丹アイフォニックホール

ご挨拶

本日は、「未来へつなぐ合唱の会」第1期演奏会ようこそご来場くださいました。

本会を立ち上げました経緯について少しご説明いたします。

戦後、日本の合唱文化は大きく発展しました。わけても日本語による合唱作品は、田中信昭先生と東京混声合唱団の先駆的な働きにより多くの曲が誕生し、また、それを見習って日本中の多くのアマチュア合唱団が、詩人や作曲家に委嘱をするという活動が広がりました。

こうして今日では毎年、新しい合唱曲が誕生し続けているのですが、それらの曲が長く歌い継がれていくためには、“知る人ぞ知る”ではなく、やはり正規の出版社による流通ルートに乗る必要があります。

しかしその曲が、一般的なアマチュア合唱団にはあまり興味を持たれない、つまり、あまり多く売れそうにない出版社が判断した場合、その曲は出版されないことになりがちです。また、演奏のための特別の知見が必要であったり、演奏時間の関係で演奏会のプログラムに組み込みにくい、あるいは特殊な楽器が必要など、様々な制約がある曲もまた、出版や演奏へのハードルは高くなります。

こうして日本の合唱文化形成に寄与しうる重要な曲であったとしても、出版されない、あるいは演奏されないために、歴史に埋もれてしまう可能性がでてくるのですが、それは日本の文化にとって大きな損失です。

本会は、そのような曲に着目し、実際に演奏をし、一人でも多くの方にその曲を聴いていただき、その存在を知っていただき、未来へつないでいこう、との思いでもって活動を開始しました。

私は幸いにして、田中信昭先生をはじめ、多くの創作家、演奏家の方々から、かけがえない貴重なことを学びました。大河の一滴のような活動ではありますが、それらを歴史に埋もれさせることなく、少しでも次の世代へつないでいきたいと思っています。

幸い、第1期として、志を共にする仲間が27名も集まってくださり、困難を乗り越えて、力を尽くしてくださいました。まだまだ課題は多いですが、まずは最初の一步を踏み出せたことを喜んでおります。

そしてそれを聴きに来てくださったお客様に心から感謝を申し上げます。

どうぞ最後までごゆっくりとお楽しみいただくと共に、今後とも、皆様のご声援を心よりお願い申し上げます。

未来へつなぐ合唱の会 代表 西岡茂樹

Program

混声合唱と日本の横笛のための

「春立つと」

作曲：柴田 南雄
詞：梁塵秘抄より

指揮：西岡 茂樹
篠笛：土師 あき子

- I. そよ 春たつと
- II. 春の初の歌枕
- III. 峰の花折る小大徳
- IV. 切利の都の鶯は
- V. 何時しかと
- VI. (第1曲のくりかえし)

混声合唱とピアノのための

「未来へ」

作曲：一柳 慧
作詩：村山 精二、川崎 洋、
鈴村 出徹、谷川 俊太郎

指揮：西岡 茂樹
ピアノ：武知 朋子

- I. 特別な朝
- II. いま始まる新しいいま
- III. あなた
- IV. 未来へ

合唱曲 「無限曠野」

作曲：柴田 南雄
構成：柴田 純子

指揮：西岡 茂樹

- I. 天駆ける鹿
- II. コサックの子守歌
- III. 雲に寄す
- IV. 裸木
- V. 小垣内の
- VI. 大白道

演奏曲目について

混声合唱と日本の横笛のための「春立つと」

混声合唱と日本の横笛のための、「梁塵秘抄」を歌詞とする組曲「春立つと」は、大阪の混声合唱団「ローレル・エコー」のために作曲した曲で、1989年6月14日着手、同年12月9日に最後の曲の作曲を終えました。

わたくしは1988年に東京の「桜楓合唱団」のために、やはり田中信昭さんからご依頼を受けて、「梁塵秘抄」の歌詞による女声合唱と筆のための、7曲から成る組曲「秋来ぬと」を作曲しました。この「そよ 秋来ぬと」の歌詞にはじまる前作と、「そよ 春立つと」にはじまるこの作品とは、いわば姉妹作の関係にあり、「そよ」のモチーフ(旋律の形)は両者に共通のものです。

柴田 南雄

「春立つと」全音楽譜出版社 1990年刊より

混声合唱とピアノのための「未来へ」

曲は4人の異なる作者の詩につけられている。

詩はそれぞれに独自の内容を持っているが、そこに共通するのは、21世紀に社会を担うことになる若い人達が、生きるということをとどのように考えてのぞむか、という点であろうか。それらの練り上げられた言葉は、合唱曲を創る上で私にとっても、大いに触発される材料を提供してくれた。

4つの異なる性格をもつ音楽であるが、聴き終えた後、そこに有機的なひとつの世界を感じとっていただくことができれば、作曲者としてこの上ない喜びである。

一柳 慧

2008年12月21日大阪大学混声合唱団第50回記念定期演奏会プログラムより

合唱曲「無限曠野」

「無限曠野」は、東京トロイカ合唱団の委嘱作品で、テーマをシベリア抑留にしたいという希望とともに、辺見じゅん著『収容所(ラーゲリ)から来た遺書』が送られてきた。そこで新曲は「行って帰らなかった」人々へのレクイエムとすることになり、この本から、山本幡男の詩「裸木」を選んで中核とした。全6曲の前半をロシアの、後半を日本のテキストで構成して「無限曠野」と題したが、それはシベリアの形容であるばかりでなく、帰れなかった人と残された人の心象風景でもある。

I. 「天駆ける鹿」 エヴェンキ族の神話

ヘラジカに盗まれた太陽を取りかえしに行き、星になったエヴェンキの若者の物語。エヴェンキはシベリアのツングース系狩猟民族で、もともと、トナカイやヘラジカを捕らえて生活していた。斎藤君子著『シベリア民話への旅』による。

II. 「コサックの子守唄」 レールモントフ詩、麻田恭一訳

19世紀ロシアの詩人レールモントフは二度もカフカズに追放され、この地を背景に多くの詩を書いた。コサックは辺境に逃亡した農民が作った騎兵集団で、ロシア政府はしばしばその戦力を利用した。

III. 「雲に寄す」 ア・ベストウージェフ詩、麻田恭一訳

1825年のデカブリストの乱で、有カメンバーの一人だったア・ベストウージェフは120人の同志とともにシベリアに送られた。いつの時代にも多くの人々が彼と同じように、自由に空を漂う雲を羨んだであろう。

IV. 「裸木」 山本幡男詩

山本幡男は収容所でアムール句会を主宰し、昭和29年にハバロフスクで病死した。書いたものが持ち帰れなかったので、仲間たちは彼の詩句や遺書を記憶して家族に伝えた。この詩は、死期間近の山本が病室の窓からみえる裸木をうたったものだが、柴田はたびたび「これは重い詩だ、曲を作るのに力がある」と言っていた。

V. 「小垣内の」 田邊福麿 万葉集巻第九より

故郷に帰る途中、足柄の坂で死んだ防人を悼む挽歌。万葉の昔から、国のために命を捨てた男たちがおり、残された女たちがいた。この曲のみ女声三部で書かれている。

VI. 「大白道」 草野心平詩

「大白道」は終戦前年の雑誌『亜細亜』に発表された。詩人は「無限の天の大白道に」戦死した将兵たちの行進を幻視する。終曲のテキストを定めるとき、柴田はいくつかの候補の中から迷わずに「大白道」を選んだ。戦争を知らない世代が、この曲から「戦いの空しさへの怒り」を受け継いでくれるように願ってやまない。

柴田 純子

1997年7月12日豊中混声合唱団第37回定期演奏会プログラムより